



大正9年頃の松山犁製作所従業員 館蔵

この集合写真には当時の鍛冶職人が3人写っている。

前から2列目右端が大正9年に雇い入れた石坂政一(明治34年生まれ)で、同じ列の右から3番目は原造の弟松山晋三、その隣が高畑藤作(明治25年生まれ)、大正5年中村六郎方から雇う。

4列目の右端が大正4年小林大土方より雇い入れた丸山長次郎(明治23年生まれ)。

石坂政一と高畑藤作は永く松山犁製作所に勤めた。

1. 大正9年頃の松山犁製作所従業員写真……………表紙
2. 松山原造と上田犁創業者
～鍛冶職人中村六郎を追って～ …………… 2～5
3. 所蔵する丸山晚霞作品を含む六曲屏風について …… 6
4. 報告事項…………… 7～8

松山原造と上田犁創業者

鍛冶職人中村六郎を追って

学芸員 松井 以久子

松山原造が明治三十五年(1902)に松山株式会社の前身である単鐵(たんてつ)山(やま)製鐵所(せいそ)を創業した当時、犁先(れいせん)の製造を委託していたのが上田鍛冶町の鍛冶屋中村六郎(なかつむら六郎)でした。上田鍛冶町の歴史は『館報第十七号』「上田における金物商のおこり」に書かれているので割愛しますが、中村六郎は高い技術力を持った鍛冶職人でした。

今回は松山原造と後に上田犁製作所を創業した鍛冶屋中村六郎の関係を読み解いていこうと思います。

試作を繰り返していたころ

原造の日記によると犁(馬耕器)試作の記述が出てくるのは小県郡の農事助教手をしていた明治三十年六月三日に東内村の横山康次郎へ製作の注文を出した、という記述から始まります。そして明治三十一年一月十九日山岸実太郎と共に大工を呼んで馬耕器を作った、と続きます。その後上田の大工に馬耕器の用材を頼んで試作を行っていたようです。

明治三十二年六月埴科郡農会

へ移籍したため埴科郡にて馬耕器製作について熟考し、翌年から本格的に馬耕器の試作に取り組みました。当時は原造本人が埴科郡にいたため大工も鍛冶屋も埴科郡内の職人に依頼していたことが当時の日記から読み取れます。

明治三十三年十一月九日には試運転を行い好結果だったため当時埴科郡郡長だった山中助蔵氏も試運転のようすを見に来て「大賛成ヲ得」と日記には書かれており、上司にも認められた犁が完成しました。その後同年十二月には埴科郡農会を依頼解職し上田に戻り犁を製造する準備を始めました。

東上田に戻って

依頼解職した後、本拠地を和村東上田(現 東御市和)にある原造の養父田中新太郎宅に移しました。明治三十四年に入るとまず特許申請の準備を本格的に始め、三月八日に特許出願書を郵送し、その後犁の製造に取り掛かります。日記によるとまず三月十七日に上田鍛冶町の鍛冶

職人小林竹司に犁製造の相談をし、四月八日から和村の大工清水栄三郎に製作を依頼し、四月二十日に二挺の犁が完成しています。

鍛冶職人中村六郎との出会い

上田鍛冶町の鍛冶職人中村六郎が初めて原造の日記に出てくるのは明治三十四年五月十九日です。「犁に関する色々相談」と書かれています。誰の紹介でどのようにして出会ったのかは日記には書かれていませんが、これ以降中村六郎に犁先などの製作を依頼していきます。この年の十月には改良に関する相談をし、十一月には新しい犁も完成しました。日記によると何度も鍛冶町の中村六郎方に足を運び試作、改良を繰り返しながら協力関係を築いていった様子が垣間見られます。この年の十二月に特許番号の通知が届き、特許を取得し本格的に量産体制を整えていきました。

先にも述べたように明治三十四年当初、犁先並びに金具は上田鍛冶町の鍛冶職人小林竹司に注文を出していたようですが、この小林竹司の名は七月八日の日記が最後の記載となっています。上田市図書館に『明治三十七年鍛冶町住民氏名ならびに職業(百三十八戸)』昭和四十八年



「明治三十七年 鍛冶町住民氏名ならびに職業」より作成

鍛冶町荒井岩雄氏製作による

(ママ)と書かれた地図がありました。それによると「かじや中村六郎」の家は通りを挟んで向かい合っているように描かれています。その後大正十三年発行の「上田市街宅地軽便地図」によると小林竹司宅があった場所も中村六郎(中村太郎と誤記)となっているのを見ると、小林竹司は明治三十七年以降なんらかの理由で廃業又は転居したのではないかと考えられます。

明治末期の原造と中村六郎

鍛冶職人の小林竹司が原造の日記に登場するのは明治三十四年七月八日が最後となっていて、それ以降は中村六郎が主に犁先等金具を作っていたものと思われる。明治三十五年の日記に中村六郎の登場回数を見ると二月は一回、二月は一回、三月は一回、四月は一回、五月は一回、六月は一回、七月は一回、八月は一回、九月は一回、十月は一回、十一月は一回、十二月は一回となっており頻繁に取引をしていた様子が

わかります。また昼食や夕食を中村六郎宅で頂いたり、酒を酌み交わしていた記述も日記には書かれているところからお互いに親密な間柄だったことが窺われます。

原造の真蹟「原造自叙伝」によると、「上田犁製作人中村六郎八明治三十三年本犁特許出願中ヨリ各追加特許ノ犁金具製作ニ従事セシメ置キ 明治三十七年・八年出兵中モ他ニ製作セシメズ援助シ、大正三年七月迄専門ニ継続セリ」と記載されています。当館蔵の写真（写真1）に『兵站電信部隊第二小隊第二分隊 中村六郎 明治三十七年五月十日』と裏書された軍服姿のものがあり、このころ日露戦争に従軍していたことがわかります。日記や仕訳日記帳には出兵した日を特定する資料は見当たらない



写真1 (当館蔵)
明治37年中村六郎 出兵前に撮ったと思われる
東京の銀座一丁目にあった小嶋写真館にて撮影

かつたのですが、恐らくこの写真の裏書の日にちの後だったのではないかと思われます。仕訳日記帳によると明治三十九年二月九日「中六凱旋祝儀 五十銭」、また同日の懐中日記には「午前中在宅 中六ヨリ使来ル 午後臨時ニテ上田二行キ 中村六郎歓迎ヲナス大ニ頂キ職工ヲ大ニ優待セリ 午後降雪アル」(原文ママ)とあるように、原造は五十銭の祝儀を持参し中村六郎の職工たちと六郎の無事の帰還を祝ったことがわかります。本業に戻った後、同年の七月二十五日に原造の長男篤が誕生すると八月二日には中村六郎より誕生祝いの書簡が届いている様子から変わらぬ取引が継続されていることがわかります。

松山犁製作所鉄工部と上田犁製作所開設

中村六郎が独自の犁を発明、製造し始めた時期については、当館所蔵の特許公報（大正三年六月五日発行）によると大正二年七月七日に特許を出願し、大正三年四月二十一日に取得していることから推測して、大正二年か三年ごろに開設したのではないかと考えられます。今回は当館蔵の資料をもとに上田犁製作所開設とそれに伴う事柄を時系列に沿ってまとめてみようと思えます。(写真2)



写真2 (当館蔵)
大正4年8月発行の上田犁製作所パンフレットより
軒先に自転車が置かれている

「制作部・販売部・勘定明細帳第四号」の「金具」の欄に中村六郎との取引と並行して明治

四十一年十月から小林大作という名前がでてきます。この小林大作は和村の鍛冶屋でしたが、急に帳簿に名前が出てくることから、このころから中村六郎の上田犁製作所を設立する動きがあったのかもしれない。明細帳の続きを見ていくと大正三年八月に中村六郎への支払いを全て終わらせているのがわかります。松山犁製作所において鉄工所を作った年月を追うのに総勘定元帳を見てみると、「鉄工建」と書かれている欄がありました。この科目があった時期は大正四年七月から大正五年九月までで、鉄工所建設に関わる支払いが全て終わったのがこの大正五年九月

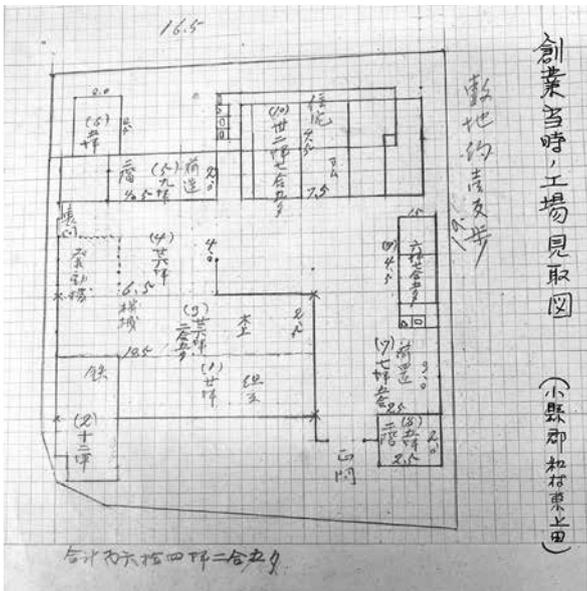


写真3 (当館蔵)
大正4年頃 和村時代の松山犁製作所見取図
左下には「鉄 十二坪」と書かれている

となるため、それ以前に稼働し始めていたのではないかと思われまます。また松山犁製作所の労働者名簿（自明治四十三年 至昭和二十一年）を見てみると大正四年十月を頭には何人かの鍛冶工を雇入れているのがわかります。その中には永く松山犁製作所に勤めていた高畑藤作の名前もありました。彼の履歴によると、松山犁製作所に入る前に四年間ほど中村六郎のもとで仕事をしてきたようです。その他、和村の鍛冶屋小林大作のもとにいた鍛冶工の名前も労働者名簿には書かれていました。(写真3)



写真4 (当館蔵)
大正6年原造が上田犁製作所を訴えたが棄却された時の上田犁製作所側の広告

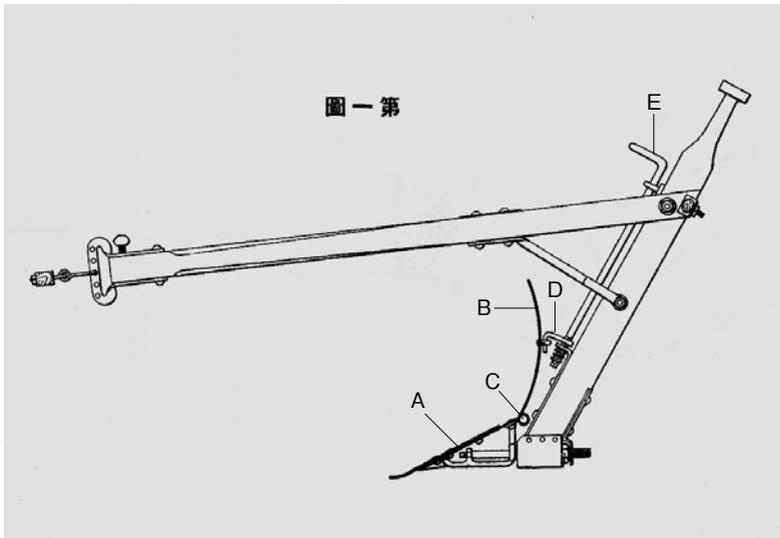


写真5 (当館蔵)
高低兼用改良上田犁
大正3年 特許公報掲載写真

上田犁製作所
写真4は上田犁製作所側からの内容になりますが、松山原造が上田區裁判所に特許侵害で上田犁製作所を提訴したが棄却された、ということが書かれています。原造が提訴に踏みきる程、上田犁が普及し始めたのだと思います。特許公報(大正三年六月五日発行 当館蔵)によると上田犁製作所の高低兼用改良上田犁(写真5)は、犁先(写真

5のA)と犁へら(写真5のB)の間に裏側より金具(写真5のC)を取り付け、この金具によって犁先と犁へらを連結し犁先と犁へらの角度を調整できるようにし、犁へらの裏に金具(写真5のD)と回転柄(写真5のE)を付けて右反転左反転できる独自の双用犁でした。残念ながらこの裁判の資料に行き当たれなかったため詳細はわかりませんが、この回転柄の部分が特許侵害に当た

ると原造は考えたものと思われる。 「大正十五年 改良農具ニ関スル調査 長野県」(松山記念館蔵)によると改良犁の県内での普及の順位は松山犁に続く二番目に多く普及していたことがわかります。各郡市別改良犁機調によると小県郡内や下高井、上伊那など県内のほとんどの地区で上田犁が使われていたことがわかります。

大正十五年「改良農具ニ関スル調査 長野県」より抜粋

改良犁調			
松山犁	六九六三	植松犁	四六〇
不明	一五八二	波多犁	四三〇
上田犁	一三八五	藤沢犁	二七〇
山崎犁	五二八	小池犁	二〇〇
鳥羽犁	五一二	栗林犁	一八九

大正十五年「改良農具ニ関スル調査 長野県」より抜粋 各郡市別改良犁調べ 総員数上位五番目まで抜粋

都市別	総員数	種類名及び員数
上伊那	三,一九三	松山(一,〇九六) 上田(四九六) 山崎(一) カルチベーター(六) 植松(一〇) 上松(九) 船底(三) 不明(一,五七二)
東筑摩	二,二一〇	松山(九四六) 福岡(六) 松崎(二六) 鳥羽(三六二) 波多(四三〇) 栗林(一八九) 堀末(一一八) 改良(五六) 野村(四五) 軽便改良(二〇) 眞々部(六) 仙十(四) 寺島(一) 磯風(一)
北安曇	一,五三六	松山(九二四) 上田(三二二) 山崎(一四〇) 鳥羽(一五〇)
下高井	一,四九二	松山(八二一) 上田(五九) 福岡(二五) 山崎(十一) 吉田(七) 春山(一五四) 藤澤(二七〇) 高山(八) 櫻井(四) 抱持立(二五) 井上(三五) 押持(八) 武田(六三) ドグレスハロウ(一) 秋澤(一)
下水内	一,〇五〇	松山(七八五) 上田(一九二) 山崎(五三) 春山(二〇)

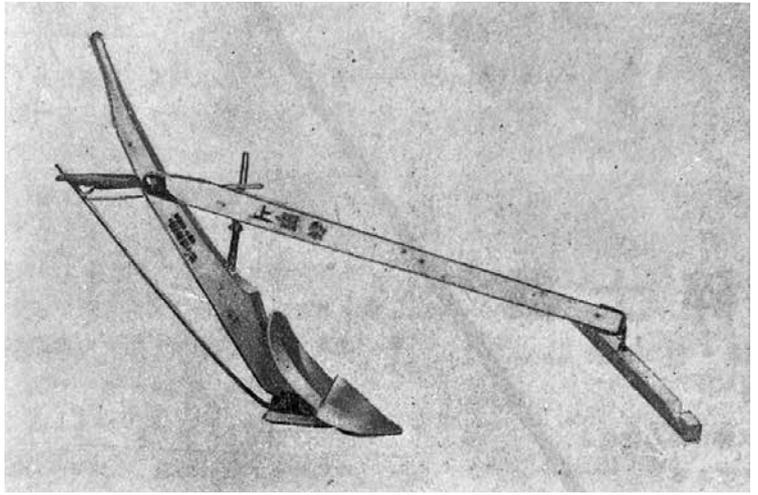
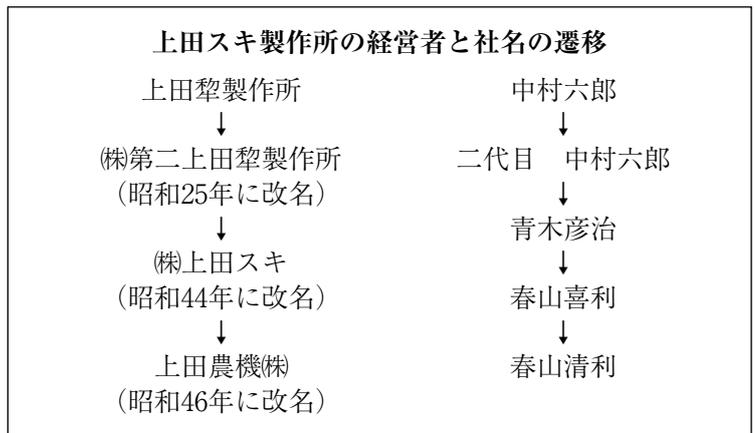


写真6 (当館蔵)
上田犁の写真



上田犁製作所で造られた代表的な犁は「双用徳用號」や「双用ホーク型」などがあり、特徴としては安定性があり土が反転しやすく深淺耕どちらにも自由にでき、ホーク型はどんな土壌でも粘着せずに耕せるというところだそうです。(写真6)

大正十三年十一月刊行の「上田商工案内」には馬耕犁の欄に「鍛冶町 中村六郎 営業税三十六円七十銭 所得税百十三円五十銭」、次いで昭和十五年刊行の「上田市商工案内」には「鍛

冶町 上田犁製作所 中村六郎 営業収益税八十七円 営業税六十一円六十銭」と記載されており、順調な経営を続けていたことがわかります。

上田犁製作所は中村六郎の養子にあたる二代目中村六郎が会社を引き継ぎ、昭和二十五年に「(株)第二上田犁製作所」と改名しました。その後青木彦治に経営が移りました。鍛冶町に住んでいる青木彦治の実娘、青木裕子氏にお話を伺ったところ、当時彦治は上田市房山に住んでいて

青木忠久という鍛冶町に住んでいた方が責任者として事業を任されていたそうです。

畜力犁全盛期の「上田犁製作所」のようす

上田犁製作所が鍛冶町にあったころのようすを、鍛冶町に今もゆかりのある太田紋店の店主太田俊一氏とイガラシ理髮店の五十嵐ヒサ子氏にお話を伺いました。

太田俊一氏はご自身のお父様から聞いた話だと、第二次世界大

戦後復員してきた近所の人々を積極的に雇い入れ、余った木材を風呂等の薪にするよう分けていたそうです。五十嵐ヒサ子氏によるとイガラシ理髮店の土地は当初二代目中村六郎から借りていたそうです。昭和三十年代には理髮店の道を挟んで反対側にあった上田犁製作所の事務所には、朝は発送待ちの犁が積み上げられトラックが引取りに来ていたそうです。そして夕方になればまた、次の日に発送する犁が積み上げられていたそうです。

上田犁製作所は現在上田農機(株)と社名が変更になり、東御市滋野にあります。現社長である春山清利氏にもお話を伺いました。ご自身が七歳ぐらいのころ(昭和四十年前半) 上田市鍛冶町にあった第二上田犁製作所の事務所には土間があり、狭い所にたくさんの方が働いていたのを覚えているそうです。また事務所前の道は勾配がありティラー用のスキが積み上げられていたそうです。同氏によると昭和四十六年前後には上田犁製作所のOB会があり、百名程の大宴会を上田温泉で行っていた記憶があるそうです。

さいごに

原造は犁先に鋼はがねを付けた第一人者と言われています。そのため試作の段階から鍛冶屋に出入りしていた様子は日記から読み取ることができそうです。そのような中、原造の日記によると明治三十四年五月十九日から始まった中村六郎との取引は犁製造者と鍛冶屋から、犁を製造する同業者となりお互いに切磋琢磨する関係となりました。

袂たもとを分かつ形にはなりませんが「土を耕す」という共通のテーマを持ち、そして地元根付く経営という点において原造と中村六郎は同じ方向性をもっていたことがわかりました。また、中村六郎が犁製造に舵を切ったのが先か、原造が事業拡大のために自社の鉄工部を作ろうと思っただのが先かは定かではありませんが、中村六郎の後任に和村の鍛冶職人小林大作に犁先の製造を依頼しつつ、松山犁製作所に鉄工部を作り増産体制を整えていきました。

(文中敬称略)

【参考文献】

- 『上田老舗図鑑』 滝沢主税編 平成十六年
- 『明治三十七年鍛冶町住民氏名ならびに職業(百三十八戸)』 荒井若雄 昭和四十八年
- 『上田商工案内』 大正十三年
- 『上田商工案内』 昭和十五年
- 『館報第十七号』 「上田における金物商のおこり」 田中壽子 平成二十年

所蔵する丸山晩霞作品を含む六曲屏風について

松山記念館で所蔵する数少ない美術品に中村不折（一八六六～一九四三）の中国の故事を描いた墨画や鳥羽宗雄（一九〇六～一九九〇）の洋画とともに六曲屏風があります。

松山式双用犁の発明者松山原造は豪華な暮らしを嫌い、芸術作品の蒐集に全く興味を持たなかったためにあまり美術品が残されませんでした。

しかしながら原造は美術品と縁遠いところに暮らしていたかというところ、原造を養育してくれた田中新太郎の家が代々芸術文化に惜しむことなく財を使い蒐集して、田中新太郎が後に事業に失敗し財産整理をしたときの目録をみるとたくさんの書画・書物・美術品があったことがわかります。こうしたことから原造が育った環境は文化的な書画や書物に囲まれたものだったことを知ることができます。

収蔵する紙本六曲屏風は、書二幅、動物画一幅、山水画二幅、大和絵一幅を六曲半双に仕立ていて、大きさは縦一七三センチメートル、横三五四センチメートル。この中の三幅には大正八年の年号が記され、屏風が大正八年ごろの制作であることが窺えます。

このうちの山水画二幅に松山原造の暮らす小泉郡で制作活動をした丸山晩霞と青木石農の作品があり、いずれも大正八年の制作年が記されています。

丸山晩霞（一八六七～一九四二）は、東御市柵津の出身。生家は養蚕・蚕種農家で、父は蚕種を商うため横浜に向くほどの実業家でありました。十七歳で上京し油彩を学び、二十三歳の時に第三回内国博覧会で油彩が入選。三十三歳には欧米、エジプト、インドを旅行し、帰国後は太平洋画会の創立に参加して以降全国各地で水彩画講習会を開いて水彩画の普及につとめました。明治四十年と翌年に文展に相次いで入選。山村や山岳風景を得意とし、高山を背景にした装飾的な高山植物を多く描いて大衆に好まれました。

丸山晩霞は明治末頃から南画・文人画への接近を試みています。「和装水彩」と呼ばれ、大正期には各地での頒布会で人気も高かったそうです。大正期の晩霞は「写意の表現を求め、南画的な水彩画を提唱」して水彩画の革新に取り組みしました。

松山記念館に所蔵する丸山晩霞作品は、険しい山の麓の村を歩く旅人を描いていて、遠景と

中景にかけての空間構成の図様は文人画探求をしていた時期の作風を知ることのできる一幅と言えましょう。

青木石農（一八八九～一九六八）は、小泉郡塩尻村（現 上田市塩尻）の原家に生まれ、十歳の時に東内村（現 上田市東内）の代々神官を務める青木家の養子に入りました。二十歳の時に小泉郡坂井村（現 上田市塩川）の南画家笹沢樅亭の門下となり、神主の仕事のかたわら山水画を描き小泉郡下に作品を多く残しています。石農の描く山水画は製糸業や蚕種業で潤っていた小泉の人々に好まれ、大正期



からの本格的な制作活動が支えられました。

六幅のうち漢詩一幅は、左上の画賛に記された内容から大正八年夏に穆英の号を称する新井石禪が書いたものであることがわかります。新井石禪は大正九年に曹洞宗の中心寺院である總持寺の管長に就いています。漢詩はその前年に満州へ巡教したようすを吟じています。

他の三幅のうち大和絵は土佐派の作風で雅号は「蕃山」、また馬を描いた画については雅号が「古浅」、また短歌のかな書は「埋肅居士」「心識筆耕」の落款があるため地域に残る文献資料から人物を追ってみました。いずれも辿り着くことができました。

丸山晩霞記念館館長の佐藤聡史氏は「大正八年に誕生した原造の娘禮子を祝うものであるのなら、作品左上の画賛に誕生を祝す為書きがあるはず。誰かが

紙のめくりで所持していたものから六枚を選び屏風に仕立てたものではないか。晩霞の作品の中では、力を抜いた作風である」との所見をくださいました。

この六曲屏風は「小泉郡ゆかりの書家や画家の作品を蒐め仕立てたものではないか」との思いつきから作者の関連性を調べてみましたが、解明には至りませんでした。どのような経緯で大正八年の作品を蒐めた屏風が松山原造のもとに来たのか、今後背景を調べていきたいと思えます。（学芸員 田中壽子）

【引用・参考文献】

- 『丸山晩霞と日本の水彩画の流れ』平成十年 長野県信濃美術館刊
- 『青木石農 平林大虚 笹沢樅亭』昭和六十年 丸子町郷土博物館刊
- 『信濃画家一覽』昭和四年 青木石農編
- 『上田小泉誌第三卷』昭和四十三年 上田小泉誌刊行会編
- 『上田・小泉文化大辞典』昭和六十二年 信濃路出版刊



右 丸山晩霞画

下 青木石農画



松山記念館日誌

月	日	曜日	内容・実施事項
令和4年(2022)年			
10	13	木	HP編集会議
10	24	月	季刊誌「iichiko」の取材
10	25	火	館内ビデオ編集素材の撮影(写真①)
10	31	月	上田市宛、文化芸術施設活動継続に係る調査票提出
10	31	月	館報「まつやま」31号発行
11	17	木	令和4年度健康保険委員研修会参加(事務長)
11	25	金	出前講座 JA城下 信州上田学講座「近代犁の発明者 松山原造」(田中学芸員)(写真②)
12	6	火	松山記念館運営会議(関係者6名)
12	19	月	(一社)馬搬振興会「馬耕・馬搬等の馬活用報告会」参加(田中学芸員、松井学芸員)
12	20	火	第26回理事会(令和4年度中間事業報告と令和5年度事業計画書、予算書等の承認他)
12	28	水	行政庁長野県へ令和5年度事業計画書等の提出
令和5年(2023)年			
12/29	1/5	木~木	12/28~1/5年未年始休業
1	10	火	ホームページリニューアル公開
1	19	木	令和4年度会計及び業務監査
2	1	水	第27回理事会(令和4年度事業報告及び決算書の承認その他)
2	3	金	季刊誌「iichiko」5冊、(松山記念館記事掲載)文化科学高等研究院より受贈
2	6	月	ティラー用スキの開発について松山(株)のOB小林さんからの聞き取り調査(写真③)
2	17	金	第15回評議員会(令和4年度事業報告及び決算書の承認その他)
2	20	月	長野県博物館協議会加盟申込み
2	20	月	長野県立歴史館より企画展「高遠藩の遺産」1冊受贈
3	3	金	理事7名全員、監事1名役員改選登記完了
3	8	水	(株)ビコンジャパン5名来館見学
3	9	木	松山記念館運営会議(関係者6名)
3	14	火	長野県知事宛「事業報告等の提出書」提出
3	20	月	松本市立博物館より「あなたと博物館」館報受贈
3	24	金	井戸尻考古館学芸員、職員7名来館見学(富士見町)(写真④)
4	3	月	長野県教育委員会宛「青少年を対象とした取組等に関する実績報告」提出
4	3	月	松山(株)新入社員9名来館視察研修
4	10	月	日本のあかり博物館(小布施町)より館報受贈
4	18	火	下伊那農業高等学校へ図書等寄贈説明訪問
4	19	水	須坂創成高等学校へ図書等寄贈説明訪問
5	17	水	令和5年度長野県文化財保護協会総会講演会聴講(田中学芸員、松井学芸員)
6	1	木	令和5年松山(株)新入社員出前研修9名(松山記念館担当)
6	2	金	長野県博物館協議会総会出席(田中学芸員、松井学芸員)
6	2	金	長野県博物館協議会視察 善光寺他(田中学芸員、松井学芸員)
6	9	金	公益セミナー「公益認定法改正の方向性」(全国町村議員会館)事務長受贈
6	13	火	関東甲信クボタ新入社員来館研修(18名)
6	19	月	長野県立歴史館より資料等の受贈 ①研究紀要第29号②長野県立歴史館収蔵文書目録③長野県立歴史館所蔵品選
6	24	土	令和5年度米熊・慎蔵・龍馬会定時総会出席(事務長)
7	14	金	須坂市立博物館、長野県立美術館視察研修会(松山記念館役員、評議員、職員11名参加)
7	19	水	箕輪町農業委員会来館研修(23名)
7	20	木	長野県農業大学校来館研修(11名)
8	13~16	日~水	盆休み
8	28	月	上田市長、上田市教育委員会宛 10/27文化講演会の申請書提出
9	25	月	須坂創成高等学校へ図書等の寄贈
10	27	金	第29回文化講演会・演題「自然農法による米栽培技術」



①館内ビデオの撮影



②出前講座「近代犁の発明者 松山原造」



③松山(株)OB小林さん聞き取り調査



④富士見町井戸尻考古館学芸員、職員来館



◀ 視察研修

新型コロナウイルス禍によって中断していた役員、評議員および職員の視野拡大と知識向上を目的とする視察研修を3年ぶりに開催。7月14日(金)、令和3年7月にリニューアルオープンした須坂市立博物館と令和3年4月にオープンした長野県立美術館を見学し、施設リニューアルの最新情報について研修しました。

ホームページのリニューアル▼

ホームページのリニューアルを行い、内容の刷新とともにWebデザインを新しくしてスマホに対応した閲覧環境を整えました。



理事会開催

- ★令和四年十二月二十日(火)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第二十六回理事会が開催され、
- ①令和五年度事業計画書(案)・同収支予算書(案)について審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②その他報告事項承認。
- ★令和五年二月一日(水)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第二十七回理事会が開催され、
- ①令和四年度事業報告書(案)及び事業報告の付属明細並びに同収支決算書(案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②定例評議員会の招集について令和五年二月十七日(金)協同サービス(株)二階ホールにおいて、開催を可決承認。
- ③その他報告事項承認。

評議員会開催

- ★令和五年二月十七日(金)協同サービス(株)二階ホールにおいて、第十五回評議員会が開催され、
- ①令和四年度事業報告書(案)及び事業報告の付属明細並びに同収支決算書(案)及び財務諸表等を、監事による会計監査報告の後慎重審議され、出席者全員の承認を得た。
- ②その他報告事項承認

松山(株)新入社員の見学

松山(株)の令和五年度の新入社員は、四月三日(月)の入社式終了後、当館を訪れ、松山(株)創業以来の稗及び稗の歴史を研修した。



令和四年度当館見学者

開館日数	二七七
見学者総数	三三二
〈内訳〉	
県外(含む外国)	二二・六%
東信	六三・三%
北信	一一・七%
南信	〇%
中信	二・四%

第二十九回文化講演会開催予定

松山記念館では、令和五年度第二十九回文化講演会の開催を予定しています。

日時：令和五年十月二十七日(金)
場所：松山株式会社三階ホール
講師：公益財団法人自然農法国際研究開発センター 研究員 三木孝昭氏

演題：「自然農法による米栽培技術―抑草のための土づくりのポイント―」

主催：公益財団法人松山記念館
後援予定：上田市、上田市教育委員会